国語学史・国語研究資料

竹岡正夫

従来大体二人の分担であった（『国語学』121展望総記参照）国語学史と国語研究資料との二項目を今回一人の担当として網羅主義でなく重点主義を原則にするとの展望検討委員会の方針に添い、一方では紙数の制限もあって、担当項目のうち特に国語研究資料の方は問題指摘方式を採らざるを得なくなった。おびただしい個々の資料類は『国語年鑑』『国語・国文学図書総目録』『国語学論説資料』や『国語学』『国語と国文学』その他の新刊紹介等に譲ることをお許しいただきたい。展望子の常として、その期の業績は可能な限り掲げ、もって著者・論者への礼を尽くすとともに展望子の博捜ぶり努力ぶりをも顕示したい意欲に駆られるものだが、この際は勇断を奮い多くを割愛した次第である。種々著書・論文を寄贈して下さった方々にはここで厚く感謝申上げるとともに深くおわび申上げる。

以下、昭和55年1月から56年12月までの刊記のある著書・雑誌及び紀要類の論文を対象とし、敬称は略させていただく。

一、国語学史

ここでいう〈国語学史〉とは〈広く国語の反省・研究の歴史を意味し、わが国の学問史の一つとして、文化史の中の一つの位置を占めるものである。同時にまた、国語学自身のためには、現在この学の立つ立場を反省し、将来進むべき方向や、採るべき方法を考えさせるという大きな使命を持っている。〉〈国語意識も言語生活の中に含まれるはずであるから、国語学史の一辺は国語史と連続することになる。〉（『国語学大辞典』池上禎造）とする説明に従う。ただし国語史があくまでも〈(1)過去の各時代における国語の個々の事実。(2)国語の、時代による変遷の事実。〉（同、中田祝夫・築島裕）の世界であるのに対し、国語学史は〈国語を対象とする組織的研究〉であるところの〈国語学〉（同、林大）の〈歴史〉でなくてはならない。

I てにをは研究史の研究

1 専門書の刊行と翻刻・研究 (1)〈てにをは研究史の最初の専門書〉（佐藤宣男『国語学』123新刊紹介）というべき(1)根来司『てにをは研究史――てにをは秘伝書を中心として――』（明治書院、昭55・8）の収穫をまず特記したい。著者自身の「わが著書を語る」（『出版ニュース』昭55・9・下）と佐藤宣男の懇切な書評がある（『国語と国文学』昭56・5）。長年てにをは研究に携わっている氏にして始めて可能な手馴れた研究で、『手爾葉大概抄』『天仁遠波十三ケ条口伝』『歌道秘蔵録』の全文から「国語学大系収録書目予定」・同「内

容見本」所載の山田孝雄・橋本進吉の推薦文の類に至るまで大小とりどりの資料が随所にちりばめられ、さながら「てにをは研究資料館」の観もあって有難い。あえて望蜀の言二、三――、〈同じ定家がその見解を抽象的に簡略に述べるにしても、手爾葉大概抄の場合は（言葉に関する部分の見解であり、てにをは研究であるから）詠歌大概のようにうまくいかなかった〉（五七頁）として『手爾葉大概抄』を定家の著と見なす点や、『手耳葉口伝』の〈序説及び…という奥書もやはり古態を存していると思われるので、この永和元年の奥書のあるこの書を仮託書とは考えない〉（九三頁）とする点、あるいは相伝を示す諸本の奥書の〈淳恵↑源意〉〈政直↑政宣〉と揺れている文字についての井上誠之助説を非とするあたり（三一四頁）、佐藤宣男も疑問視するようにやはり私どもを納得させるだけの十分な補強のほしい所。なお氏は前期に引続き和泉書院影印叢刊として(2)(3)のてにをは研究書を刊行、〈てにをは研究小史〉を添えるのも学界を裨益するところ。(2)彰考館文庫蔵『手耳葉口伝』（昭55・2）(3)萩原広道『てにをは係辞弁』（昭56・3）。(2)今期も佐藤宣男のてにをは研究書の翻刻と研究は（1）も評する如く有益であった。(4)「翻刻可秘集――姉小路式の一異本として――」（『藤女子大紀要』17、昭55・1）は巻末に『天仁遠波十三ケ条口伝』との主要校異を添え、(5)「可秘集について」（『同、国文学雑誌』26、昭55・8）はその研究で『天仁於葉之事』『春樹顕秘抄』に通ずる面が認められるとする。(6)「和歌手爾於葉見聞私録」とテニヲハ」（『同、紀要』18、昭56・1）は安永八年越後の僧自謙の著の条毎に『春樹顕秘増抄』『手爾波大概抄之抄』『一歩』等の説と対比してその特色と価値を明らかにしたもので、九六頁にも及ぶ力作。テニヲハ・事項索引（プリント版）も便利。中で〈肝心の哉〉を〈感心の哉〉とするが、古来〈中の哉、第三の哉〉として第三句の〈哉〉は一首の肝心として重視されている故の名称。〈ことわる〉も、〈景・情〉〈自・他〉等と共に古来の重要な用語で、〈残すことなく、すべてをはっきりと言いつくす〉と解するよりは〈物事のすぢのさあらではかなはぬことを云〉（成章『起情指揮』）とこそ解したい。(7)「翻刻歌道秘蔵録〈北海学園大学付属図書館北駕文庫本〉――亨辨のてにをは研究資料として――」（『同、国文学雑誌』27、昭56・3）の亨辨の注釈の文法学史上の位置を(8)「北海学園大学付属図書館北駕文庫所蔵の『歌道秘蔵録』――亨辨（邁危子）のテニヲハ研究資料として――」（『山梨英和短期大学国文学論集』昭56・10）で考察、中に成章や宣長の説も見えるとする。(9)松野陽一『江戸堂上派歌人資料習古庵亨辨著作集』（新典社、昭55・7）が右亨辨の注釈や著『和歌童蒙抄』などをも収めている。

2　漢語学からの照射　汲古書院「漢語文典叢書」（昭54～）の刊行により漢語学の側からの江戸期国語研究への照射の活発化が予想される。(10)新川正美「近世における国語文典と漢語文典との関係――『てには網引綱』の場合――」（『香川大国文研究』6、昭56・9）は『網引綱』の言語観察の中心〈軽重緩急〉の視点が当時の漢語文典から来たことを、(11)同「挿頭題」の語学的背景について――特に漢語文典との関係など――」（『香川県高校国語教育研究会国語』34、昭56・11）も同じく『かざし抄』の「挿頭題」の背景に漢語文典のある事を解明する。五十音順に語を配列するのは漢語学では普通であった事も了解できる。(12)村上雅孝「荻生徂徠の訓読観」（『共立女子大文芸学部紀要』26、昭55・2）(13)同「近世の漢文訓読における一問題――荻生徂徠の訓読の世界――」（『国語学』123、昭55・12）が新分野開

拓として注目される。(12)は〈俚言を用いる「訳」がより「人情」に近い〉とした事などを説明、(13)は徂徠の訓読の背景・展開、近世漢文訓読史へのかかわり方を論究。(14)杉本つとむ「徂徠とその言語研究」(『杉本つとむ日本語講座』7、桜楓社、昭55・6)は徂徠学と蘭学の関係を品詞名、字品字勢・精粗・真仮・軽重などの点について研究。俚言訳も〈長崎通詞らの翻訳の態度〉に由来するといった、私などの視野がぐんと広げられる指摘が諸所に見られる。(15)中村幸彦「操觚字訣の成立」(『ビブリア』75、昭55・10)は、伊藤東所の品詞について〈語辞＝存在詞、副詞、助動詞、感動詞、接続詞、代名詞。虚字＝他動詞。実字＝名詞。雑字＝自動詞、形容詞、形容動詞。(ただし虚字と雑字との別は甚だ不明瞭とする)〉と示すなど種々教えられるところが多い。

II　富士谷成章の自筆稿本の発見と学説研究

(1)私事になるので恐縮だが学界にとっては大きな収穫と信ずるのであえて書かせていただく。(16)竹岡正夫「新資料『富士谷成章自筆稿本』『脚結変例』の研究――『あゆひ抄』稿本と刊本との間――」(『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』〈以下略称「馬淵記念」〉大修館、昭56・7)(17)同「富士谷成章の「捨つる例」――『脚結変例』の「失」例――」(『国文研究』6、昭56・9)は共に従来御杖著として顧みられなかった『脚結変例』と題する書について、(16)ではそれが脚結(あゆひ)の変例(時代的変遷した用法の例)を蒐集分類した成章の自筆本で、『あゆひ抄』の稿本と刊本との間に位置する、「本抄」の一つである事、成章の小説『白菊奇談』と同じ用紙である事などを、(17)では疑問例である〈捨つる例〉、『脚結変例』では〈失〉とする用例について『詞の玉緒』の所説等と対照しつつ考察。この新資料の出現により成章の文法学の成長ひいては日本文法学の成立過程が一段ときめ細かく分析できよう。(18)同「新資料 庚寅 富士谷成章自筆『辛卯詠藻』 壬辰 などについて――成章の神代文字――」(『国語学』125、昭56・6)では『脚結変例』所載の門弟入門状況からこの書の成立年次を、『癸巳甲午乙未詠藻』の薬湯の記録から成章の病気を、『北辺迭瑣式』から成章の〈創器〉を確認、『聖廟一千首第五』(御杖筆)から交友関係とこの書の成立年次を推定、『庚寅 辛卯 壬辰 詠藻』では成章作の神代文字を調べ、オヲ仮名遣に敏感な成章の実態からその時期を考える(宣長のオヲ所属訂正時期は、筑摩版宣長全集巻五解題に拠るよりも尾崎知光「『三集類韻』の検討」『国語と国文学』昭52・12の安永二年頃説に拠るべきであった)。(2)『あゆひ抄』の学説研究では、(19)水上澄子「富士谷成章の「脚結(あゆひ)」の分類意識――脚結五分類の意味――」(『金沢大国語国文』7、昭55・3)が、脚結の分類の〈家〉を〈下ノ結ニ拘ル・下ノ結ニ拘ラヌ〉(富樫広蔭説)に二分できるとし、〈身〉〈倫〉〈属〉を渡辺実説の〈陳述度〉から見直す。成章自身も稿本に〈以下其ウクル位ヲ以次第スヘシ〉と注するゆえ、成章の〈意識〉の側からの裏づけも望みたい。(20)藁谷隆純「『あゆひ抄』片々」(『解釈』昭55・9)は、例えば〈係結〉といっても〈恨みてのみぞ過ぎしかど。〉の打合を〈ぞニど留〉(脚結変例)のようにも考えていたのであって、伝統に則っての観察が欲しい。(21)内田賢徳「副詞「あはれ」について――『かざし抄』ノオト――」(『帝塚山学院大日本文学研究』12、昭56・2)は〈あはれその鳥。〉を根底の認識法からして異なる〈その鳥あはれなり。〉と〈等価〉と見たのでは表現も脱落し、かつ古今集の歌に形容動詞の〈あはれなり〉はまだ使用されていないという歴史的事実をも忘れた論となる。『挿頭抄師説』なる書も不審。(22)新川正美「富士谷成章の動

詞観について――カイザー・シュテファン氏の論考私見――」（『国語』33、昭55・11）は既に佐田智明が〈総じて竹岡説の枠から多く出ていない〉（『国語学』121展望）と評したカイザーの論の詳細な批正。(23)三宅清『新編富士谷御杖全集』は第二、七巻に続いて、新資料を加えて第五巻刊行（思文閣、昭56・2）。遅刊が気になる。

Ⅲ　本居学派の学説と資料の研究

1　宣長の学説と著作の研究

(1)(24)湯浅茂雄「本居宣長の活用論」（『上智大国文学論集』13、昭55・2）は『紐鏡』『玉緒』『古事記伝』等に集積された活用の認識が『活用言の冊子』で体系化される過程を追究。宣長のナ変・下一段及び〈寝（な）す〉の〈な〉の扱いなど成章と同じで、今後の課題。(25)高瀬正一「本居宣長における「つつ」の理解をめぐって――『詞の玉緒』と『古今集遠鏡』――」（『愛知教育大国語国文学報』37、昭55・3）(26)同追考（同38、昭56・3）例えば〈逆接〉の〈意味〉は前件と後件との関係により決定される事を考えると、〈つつ〉や〈ながら〉が〈逆接〉の〈意味〉を表すとは必ずしも言えないなど、(20)(21)と同様、てにをは研究史の中でその視点からの凝視が要求されよう。(27)林巨樹・田代美樹・渡辺千賀子・飯田晴巳「江戸中期の国語について――古今集遠鏡訳文の助動詞研究――」（『青山語文』10、昭55・3）は確かに〈意欲的〉（『文学語学』91展望、中山緑朗、昭56・8）ではあるが、例えば〈逢はざらめやは〉の〈ざら〉に直接対応する訳語を〈逢ハズニ居ヤウカ〉の〈ズ〉と考えたり、〈けり〉を相変らず〈過去〉辞として宣長の訳語を検討するなど、伝統的言語観にもなじめず、〈けり〉については拙論もあるが、まず塚原鉄雄「平安国語の学的研究――方法の回顧と展望――」（『国語学』112、八五頁）の一読を勧めたい。(28)原口裕「本居宣長の俗言解集成稿」(4)(5)（『静岡女子大国文研究』13、14、昭55・3、昭56・3）はその完成が待たれ、(29)渡辺睦美「本居宣長『済世録』における擬態語について」（『大妻国文』11、昭55・3）の着眼は斬新だが視野が狭い。なお国語学とはいえぬが(30)宗教心理学者松本滋『本居宣長の思想と心理』（東京大学出版会、昭56・7）(31)山下久夫「宣長「雅俗」論の構造」（『立命館文学』9、10、昭56・9、10）も有益。(2)(32)舩城俊太郎『三集類韻影印と研究』（勉誠社、昭55・3）は今期の収穫。〈標目、解説文翻字、研究、付録（影印『ひも鏡』『増補てにをは紐かがみ』）〉も添える。〈研究〉と同内容の氏の論文「『ひも鏡』と『三集類韻』の関係について」（『国語と国文学』昭52・1）に対する尾崎知光の批正（「『三集類韻』の検討――『ひも鏡』との関係をめぐって――」同、昭52・12）があるが、それへの氏の対応の見られないのは学問的に物足りない。近年国語学史界をリードする尾崎知光の(33)「『活用言の冊子』から『御国詞活用抄』へ――川村本御国詞活用抄と御国辞活用鏡――」（『愛知県立大文学部論集』30、昭56・3）は第二回の『冊子』に基づいて『鏡』が作られ、道麿の独自性を顕著に出したものであるなど精確に論じ、氏の独擅場。(34)白石良夫「鈴屋入門以前の長瀬真幸――真幸・宣長第一回問答をめぐって――」（『江戸時代文学誌』2、昭56・11）は長崎県図書館諏訪文庫蔵『本居問答』の第一回により鈴屋入門以前の真幸の思想を探究。氏には新資料二点を含む(35)「翻刻・宣長判寛政元年歌合」（同1、昭55・12）もある。(36)岡本準水「『古事記雑考』一「訓例上」と浄書本『古事記伝』一之巻「訓ノ事」及び刊本『古事記伝』一之巻「訓法（ヨミザマ）の事」との比較的考察(六)――附・「訓例上」（影印）と「訓ノ事」（翻刻）及び「訓法（ヨミザマ）の事」（翻刻）との対照文(六)――」（『鶴見大紀要』17、昭55・3）は精密。(37)

尾崎知光「『鈴屋集』の初刊本について」(『愛知県立大説林』29、昭56・2)は新入手の『鈴屋集』初刊本とその奥付、最近発見の鈴木若狭宛宣長書簡その他から『鈴屋集』の〈板木出来〉の時期を確めた。宣長の懐紙や添削入り歌文、書簡の新資料五点を紹介した(38)築瀬一雄「宣長及びその周辺の資料」(『早稲田大国文学研究』70、昭55・3)も貴重。(39)岡本勝「本居家と出版書肆――本居宣長記念館蔵出版資料を中心に――」(『文学』昭56・12)も裏面史が興味深い。

2　春庭『詞の通路』研究　春庭研究はこれに集中した感がある。(40)この道の第一人者の一人島田昌彦「本居春庭『詞の通路』の「詞の延約の事」について」(馬淵記念)は〈延約〉説を春庭の分類整理をふまえて精力的に論究したもの。ハ行延言の〈現存性〉、ラ行延言の〈完了〉説、〈ク語法〉の〈格調〉説などいささか島田色を出しすぎた感がある。〈す・さす〉は〈発動性間接作用〉説(山田孝雄)を見直したい(拙著『富士谷成章全集・上』九七八頁参看)。(41)犬飼隆「『通路』下巻と『玉緒』」(馬淵記念)と(42)碁石雅利「「詞てにをはのかゝる所の事」小考」(『野州国文学』27、昭56・3)とは同じ問題を同様の方法で考察したもの。〈何―ぞ〉は成章などにも説があり、宣長からの影響を確言するためには、その説が宣長以外には見られぬという事を慎重に固める手続きも必要。

3　鈴木朖の学説研究　(43)水野清「鈴木朗の国語研究」㈢㈣(『教育国語』60、62、昭55・3、9)は、最近の学問が〈徒らに些末なことに深入りする〉(『国語学』123、山田俊雄、一〇頁)傾向の中にあってまことに豪宕で意欲的、種々教えられる。しかし例えば〈宣長の研究は成章を刺戟し、成章の分析は宣長にさまざまの問題を提起した。『紐鏡』の補正はとりあえず『活用抄』によって成され、その『活用抄』を一層整え正すために、鈴木朗は、今一度『あゆひ抄』を活用した〉㈡の如き、私など一生の課題で、このような演繹法でなく一々証跡を積んで帰納的に説得していただければと痛感される所が少なくない。〈返し状〉にしても成章の〈在状・返し状はたとしへなくかはれること多き故に〉を直ちに〈返し状はありさまに似ていると言う〉と解し、〈すゑては「何ず」といひ〉とあるのに〈ず〉を〈本〉と決めて論を進め、拙考を誤とされるなど、A説を否定するには単にB説を対立させるだけでなく、A説が元来成立し得ないことを実証する手続きも必要と思うが、いかが。(44)『文莫』5(昭55・4)は、鈴木朖旧蔵の『活語活用格』を二色刷で復刻、尾崎知光の〈鈴木朖が寛政十二年に書写せしめた『活用抄』から『活語活用格』へと発展する過程〉を跡づけた(45)「『活語活用格』の成立」と相俟って学界に寄与する一冊。(46)甲斐睦朗「『源氏物語玉の小櫛補遺』に見られる鈴木朖の言語研究の立場・方法について」(『国語国文学報』37、昭55・3)は『補遺』の延べ四八五例の注釈について調査、その約八割が同時期刊行の『雅語訳解』の見出し語と共通、テキストは宣長と同じく『湖月抄』であるという。

4　本居門下の学説・著作研究　(47)福島邦道「『古言本音考』追跡」(『実践国文学』19、昭56・3)文政十一年の石金音主の著が既に連濁や掛詞を清音で表記した例を多数集めていた事などの追跡、(48)岡田正世「いわゆる『初稿本山口栞』について」(『福井大国語国文学』22、昭56・6)伊勢の学者間に『山口栞』が普及していった状況等について、以上いずれも一歩前進の論考。継続中の(49)渡辺英二「詞つかひ(詞の小車)翻刻と注記――第十六巻の下～第十(三)四巻――」(『富山大紀要』28、昭55・3)は既刊の後藤一日の翻刻(昭51・12)を訂

正する所がある。(50)尾崎知光「鵜能玉籤(すずのたまくし)」の版本と自筆本」(『説林』28、昭55・1)は六人部是香の刊本序文の安政二年と自筆稿本の万延元年との齟齬を究明。(51)福田真久の引続き「ひも鏡中の心(翻刻)」(『国士館大教養論集』11、昭55・9)の提供も好資料といえよう。

Ⅳ　その他の近世国語学史研究

契沖には(52)井野口孝「契沖の漢学の一面――「韻会」の利用をめぐって――」(『愛知大文学論叢』67、昭56・7)があり、多数の漢籍の『万葉代匠記』への引き方を中心に調べる。(53)三宅清「『詞草正採鈔』について・再論」(『文学』昭55・7)は岩波版『契沖全集』巻十解説の誤を訂正。(54)田中文雅「賀茂真淵の万葉研究――『万葉考』への軌跡――」(『東海学園国語国文』20、昭56・10)(55)熊谷武至「『賀茂翁家集』木活本」(同)(56)国崎望久太郎「真淵の古典文学論」(『園田学園女子大論文集』16、昭56・12)はいずれも文学論ながら真淵研究には参考になる。(57)阿部八郎「安原貞室『かたこと』の用語・符号」(『近代語研究』6、昭55・5)は不濁点・熟合符・声点・ハ二四はち詰(字音語尾tを日本語化する場合、チと発音してもよく、二音節・四音節によく現れるとする白木進『かたこと』笠間選書の注を踏襲)ノについて考察。ハ二四はち詰ノについては(58)林史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」(『国語学』122、昭55・9)が三十一種の音義類を駆使して、舌内入声音は、先行母音がi、e等の前舌母音の場合ハチノ、o、u等の後舌母音の場合ハツノと表記する事が多いことを実証し、掛算の九九を巧みに詠みこんだこの文句はハ相通説の二すなわちイ段の音節と、四すなわちエ段の音節につづくばあいには「ち」をつけて―短促的に―発音すべきことを指示したものノと正す。『かたこと』に執念を燃やす白木進には今期も(59)「岩瀬文庫写本世話類聚、天理本の写本かた事なをし――「かたこと」の系譜(2)――」(『梅光女学院大日本文学研究』16、昭55・11)の着実な報告がある。(60)林義雄「『古言梯』仮名遣の実践作品としての『久邇万葉(くにまんよう)』について――解説と翻刻――」(『専修国文』28、昭56・3)は楫取魚彦(訓は氏の考証)の妻稚木(うつき)の紀行文に約半年前開板の『古言梯』の仮名遣が実践されている旨の報告。(61)三沢成博「古言梯の版種続貂」(『日本大語文』51、昭56・5)は原刻本・増補標註本の精査。『古今集和歌助辞分類』は(62)勉誠社文庫の影印で見られるようになり、根上剛士の最高の解説を得た(昭55・9)。(63)同「『古今集和歌助辞分類』と『百人一首もとのこころ』」(馬淵記念)は包括的説明である前者の著と具体的説明である後者との比較。(64)清水勝「小沢芦庵著『かなつかひ』と渾沌斎松月著『蘇字便覧』について」(『文学史研究』22、昭56・11)は芦庵(渾沌斎松月は俳号)の両著の調査。当時のこうした文人達の生活や研究のさまが興味深い。(65)佐田智明「辞格考抄本の学説について」(『熊本大国語国文研究と教育』9、昭56・1)は物集高世の抄本とその学説の価値についての例の如く堅実な論考。(66)柏谷宏紀「石川雅望年譜稿(六)――文政元年より同九年まで――」(『高知大学術研究報告』29、昭55・4＋昭56・3合併)種々の有益な資料も掲載。(67)『未刊影印橘守部著作集』(汲古書院、昭54・10～昭56・4)の所収本についての四五五頁にも及ぶ平沢五郎の解題研究(68)「橘守部撰述現存諸稿本とその成立に就いて(一)」(『斯道文庫論集』17、昭56・2)は今後の基礎文献。(69)白石良夫「中島広足と本居内遠――『歴木辨』の成立をめぐって――」(『北九州大文学部紀要』27、昭56・7)は諏訪文庫蔵の広足自筆稿本・内遠書入『歴木辨』の調

査、(70)同「中島広足『倭歌諸説』翻刻」(『文献探究』9、昭56・12)も同文庫蔵本の翻刻。

V　近代国語学史研究の充実・進展

近年、幕末の蘭学関係をも含めてこの方面の研究と資料紹介類が盛んで、目下のところ語彙と文法学説が中心であるが今後は各分野にも及ぶものと予測される。例えば『新・日本語講座9——現代日本語の建設に苦労した人々——』(汐文社、昭50・4)では、土岐善麿、ヘボン、チェンバレン、上田万年、漢字廃止論者、言文一致の作家、森有礼関係、山田孝雄、保科孝一、佐久間鼎、カナモジ実行の伊藤忠兵衛、山本有三が取上げられている。さて今期も杉本つとむの活躍が目覚ましい。(71)「現代国語学の成立とその史的背景」(『杉本つとむ日本語講座』7)は国語学の成立に江戸期の国学・西欧言語学・蘭語学の三学流を考え、その成立時期を上田万年に焦点を当てる。(72)同「日蘭比較語法研究の出発点」(同)は和漢洋兼備の中野柳圃の学説の考究。蘭学者の語学関係書中に富士谷学派のヘナ・ヨソイ・アユイ・カザシ〉の術語の見える点も注意したい。(73)同「『雑字類編』小考——その成立と影響——」(同)は明和元年(?)序の唐話語彙と日本語とを対応させた柴野栗山幼時の草稿を弟小輔らが重修上梓した字書の研究で〈日本語として定着した漢語—さらに厳密にいえば字音語—も、数多くみられる〉という。(74)同「松園梅彦『五国語箋』の小察——蘭・英・仏・魯・日語の対訳語集集——」(同)下巻は香川大学神原文庫蔵の稀覯書。〈蘭学から英語への幕末における日本人の外国語学習や、外国語観の転換の実態を示すものとして貴重〉。(75)同「現代文法用語の翻訳と成立——中野柳圃の言語研究を中心に——」(『文学』昭55・8)は現代の日本文法の内容は漢学の影響を受けた国学の伝統に負うが〈そうした内容をもることばの器は国学系ではなく、蘭学系—横文字学習から出ている〉事を探り、〈幕末の和蘭文典にみえる文法用語(訳語)一覧〉も添える。なお(76)同『江戸時代翻訳日本語辞典』(早大出版部、昭56)(77)蘭学資料叢書『訳鍵付蘭学選』(朝倉治彦解説、青史社、昭56・2)(78)『復刻明治期独逸語辞典』(鈴木重貞解説、三修社、昭56・10)などは今後の活用が待たれる。(79)塩沢和子は「現代口語文法の成立」(『講座日本語学』3、明治書院、昭56・11)で明治三〇年代の個人の文典二十種と国語調査委員会『口語法』・同別記(大正5、6)を資料として標準語確立の過程をたどり、(80)「和英語林集成・英和の部の訳語」(『国文学論集』14、昭56・1)では〈版を重ねるごとに訳語を大量に増補し、しかもその大半が新たに明治になって作られた訳語と考えられることから、格好の資料〉とする。(81)湯浅茂雄「増補訂正英和字彙の訳語——特に増補された訳語の典拠を中心に——」(同)も同様の研究で、共に綿密。(82)山田忠雄述『近代国語辞書の歩み——その摸倣と創意と——』上・下(三省堂、昭56・7)が〈辞書に対する批判精神が高揚し、我が国の辞書界が一日でも早く遅れを取戻す事有らば〉の願いのもとに漸く発刊。まさに近代国語辞書史・比較辞書学の金字塔ともいうべき壮大にして厳正、精緻な著である。ただ〈編者同士の対抗意識の強さに驚かされる〉(読売新聞、昭56・8・10)といった印象を一般に与えるほどの、例えば〈腐儒〉〈芋辞書〉さては〈麒麟も老いては駑馬に劣る〉等々の激しい叙述は御本人のためにも惜しまれる。新視点からの好論(83)古田東朔「コソアド研究の流れ(1)」(『東京大人文科学紀要』71、昭55・3)は『かざし抄』以降『広日本文典』までの諸文典を調べ〈コソアド〉の体系

づけは佐久間鼎以前にアストン、チェンバレンに見られる事を明らかにする。アストンのリスト中に『かざし抄』があるという指摘も有難い。(84)金子尚一「馬場辰猪の〝日本語文法〟――試訳――」(『共立女子短大紀要』24、昭56・2)辰猪著の原文(前半)は『国語学大系』語法総記二に所収。序文は三沢光博「馬場辰猪の『日本文典初歩』について」(『日大語文』3)・西田長寿(筑摩『明治文学全集』12)に訳がある。後半「日本語英語対照練習問題一〇〇題」は更に金子が同紀要25(昭57・2)に注つきで訳しているのを付言しておく。(85)矢野文博「『広日本文典』の研究序説(1)」(『東海学園国語国文』20、昭56・10)は国語音韻変遷の概観。(86)北原保雄「松下大三郎の先見性――「言語の構成法を論ず」を読む――」(馬淵記念)は明治四二年『国学院雑誌』連載論文にチョムスキー、ソシュール、時枝誠記らに先んずる説のある事に注目し、(87)長谷川みほ「松下文法における原辞の成立」(『国文学論集』13、昭55・2)は独自の〈原辞〉の成立状況を文法理論の展開に沿って追跡。(88)松下大三郎の俗語文典は徳田政信解説、〈理論構造一覧表〉付きの『校訂日本俗語文典付選江文典』(勉誠社、昭55・11)として、更に(89)『広日本文典・同別記』(福島邦道解説、同、昭55・4)も(90)『口語法・同別記』(同、昭55・5)も合本覆製で刊行されている。(91)堀田要治「橋本進吉と時枝誠記とのはざまにて」(『武蔵大人文学会雑誌』12、昭55・12)は〈橋本式連文節論の帰結と時枝式引出し型とのはざまでまごまごしている〉随想、(92)根来司「時枝誠記博士と国語学史」(馬淵記念)は氏の最近の研究テーマで、ここでは『手爾葉大概抄』の〈詞・手爾波〉についての時枝の解釈・評価の進展状況を追う。(93)森野宗明・小松英雄・北原保雄『佐伯文法――形成過程とその特質――』(三省堂、昭55・8)は〈品詞論重視から文論重視へ〉〈文素から文節へ、そして語句へ〉〈文の成分の種類の変遷〉などをたどり、〈資料〉に七種の文法教科書を覆刻(55年刊の著まで一六〇頁もさいて〈覆刻〉の要ありや)、〈余説〉に佐伯先生の解釈文法の見本を収める。不肖私も先生の文素、↓↑表示、接続語以前の時代の教え子で、本書の克明な追究には感服。塚原鉄雄の感想もある(『解釈』昭56・4)。なお付言、(94)北原『日本語文法論術語索引』(有精堂、昭57・1)は〈伝統的な文法研究をふまえつつ研究を進めるために欠くことの出来ない参考資料として〉(『国文学』前田富祺時評、昭57・4)今後近代文法学史研究に好箇の手引書。

二、国語学史と国語史との接点的研究

(95)山口明穂「江戸時代に於ける助詞「を」の意識」(『国語と国文学』昭56・5)は特に〈常のを〉(玉緒)〈軽きを〉(あゆひ抄)の当時の意識を成章・宣長・春庭・朖の著等を資料にして〈宣長の時代の人達の、「を」をいわゆる客語を表示し、「他」の動詞との関連を示す語であるとする意識は、必ずしも古典語の世界に立脚したものではなく、その時代の人達にとってごく身近な言語の習慣から生み出された〉と解明。同様に(96)原口裕「準体助詞「ノ」の定着――和歌の俗語訳の場合――」(『国語学』123)は成章・宣長等の和歌俗語訳を資料として、例えばその訳に講説調が出るようになると幕末にも連体形準体法専用が現れるとか、尾崎雅嘉に準体助詞〈ノ〉の徹底した使用が見られるなどの研究。更に当時一般の使用状況も知りたくなる。以上、共に新分野開拓として今後が期待される。(97)桜井靖久「枕詞「たまきはる」の語義とその受容史――宣長説の再

評価とその発展――」（『立教大日本文学』45、昭55・12）は『古事記伝』の＜阿良多麻来経（アラタマキフ）ル＞説の再評価。しかし＜タマ＝アラタマ＞＜キハル＝来経ル＞の実証が別個に必要であろう。なお(98)田中久美「枕詞「たまきはる」攷」（『解釈』昭55・3）(99)田中みどり「霊（たまきはる）剋」（『仏教大人文学論集』15、昭56・11）もあるがいずれも説得力不十分。＜国語史＞に現代語をも含めると、(100)三宅武郎「「が」の係助詞性と「徒（タダ）」の解釈について」（『解釈』昭56・12）の透視は鋭い。＜徒（積極的修辞性すなわち曲調の係辞がない）＞に対し、口語にも＜直（タダ）＞と称すべき主―述の係結のはたらきを見直し、＜これこそが…＞といった用法（昭15初見とする）から＜が＞の係助詞を認め、上表の如く文語の＜徒＞＜の・が＞＜ぞ・なん＞に相当するとする。ただ＜鶯の鳴く。＞＜君が袖振る。＞＜これなん都鳥。＞を口語文＜鶯が鳴いている。＞＜あの方が袖を振っていらっしゃる。＞＜これが都鳥です。＞に相当するとして説くのだが、そもそも右の口語文が文語文の表現するところに一〇〇パーセント適合しているかにはなお批判のあるところであろうと思われる。

《文語》	《口語》
は	は
も	も
徒	直（ゼロ辞）
の・が	が1
ぞ・なん	が2
こそ	が3

三、国語研究資料とその扱い方

今期特に顕著な現象は古辞書類の影印・復刊などの多い事で、(101)「古辞書音義集成」の五種刊行に、(102)『鸚鵡抄』（雄松堂、昭55・1、索引、昭56・5）(103)『哲学字彙』（飛田良文解説、名著普及会、昭55・8）の如きも加えると、管見に入った刊行だけでも二〇種にのぼる。そのうち(104)土井忠生・森田武・長南実『邦訳日葡辞書』（岩波書店、昭55・5）は学界待望の書。(105)「高山寺資料叢書」（高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会）(106)「石山寺の研究」（石山寺文化財綜合調査団、法蔵館）(107)「続抄物資料集成」（大塚光信、清文堂）(108)「抄物小系」（高羽五郎）(109)「古点本資料叢刊」（勉誠社）(110)「駒沢大学国語研究資料」（汲古書院）(111)「ノートルダム清心女子大学古典叢書」（福武書店）(112)「京都大学国語国文資料叢書」（臨川書店）(113)「勉誠社文庫」(114)『鎌倉時代語研究』(3)(4)、武蔵野書院）(115)『近代語研究』(6)、同）(116)『訓点語と訓点資料』(64)(65)(66)その他続々と刊行されて有難い。(117)『土井先生頌寿記念論文集国語史への道』（三省堂、昭56・6）下巻の資料編も充実している。今期の新分野の資料の主なものは、(118)杉村俊男「上代史跡より出せる木簡の国語研究資料としての調査報告」（『共立女子短大紀要』23、昭55・2）(119)同「上代木簡に表記された国語語彙の検討」（同24、昭56・2。付言、同25、昭57・2にも）(120)柳田征司「医家の抄物（一斑）」（『近代語研究』6）(121)同「医家の抄物」（『国語史への道』上）(122)東辻保和「平安時代複合動詞後項索引稿（下）」（『高知大学術研究報告』28、昭55・1）(123)国立国語研究所『日本言語地図語形索引』（昭55・3）(124)磯貝英夫編「近代文学に現れた全国方言」（『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢Ⅱ方言研究の射程』三省堂、昭56・6）(125)鎌田良二「方言助詞集」（終助詞篇）――近畿・四国――」（『甲南国文』27、昭55・3）(126)津村直「「草子地」研究文献目録」（『文学史研究』20、昭55・8）などが挙げられよう。＜本文影印＋翻刻・訓釈＋総索引＋研究＞などとパックになった重

宝な本も、(127)深井一郎『慶長十年古活字本沙石集総索引影印篇・索引篇』(勉誠社、昭55・3)(128)築島裕・小林芳規『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』(武蔵野書院、昭55・8)(129)東辻保和『打聞集の研究と総索引』(清文堂、昭56・1)(130)林重雄『ばちうずもの授けやうお・らしよの飜訳本文及び総索引』(笠間書院、昭56・6)(131)田島毓堂・近藤洋子『正法眼蔵随聞記語彙総索引』(法蔵館、昭56・8)などその代表格。

しかし一方ではこれらの資料を扱う上での留意や反省の声も出ている。(132)峰岸明「記録語文における漢字表記語の解読方法について――『自筆本御堂関白記』を例として――」(馬淵記念)は漢字表記語の解読法を反省してまずその基本事項を設定、それに基づく実演後、読法を要約、〈精確に利用する道〉を提唱。(133)森岡健二「口語史における心学道話の位置」(『国語学』123)は従来東京語または標準語成立論は江戸語→東京語→標準語(共通語)とする前提でその証明に努めてきたようだとして、抄物→江戸講義物→明治講義物→演説→標準語の線で捉え直すための一作業として各種心学道話の語法・文体を調べ、〈方言的特色が稀薄で、位相性もなく、しかも文語的あるいは文章語的要素を加味している点、道話の口語は、中立性の高い口語〉と論究。(134)木坂基にも「心学書の文章」(『佐賀大研究論文集』28、昭55・12)の労作があり、〈心学書の言語的努力は、単純に口頭語を採用したり、訓読体を崩す作業だけではない、教化の方法と密着した形での、受け手主体に近接した言語のあり方が、講席で練られ、さらに文字化の段階でも練られて、独特の心学話体を形成していった〉事を精細に説く。(135)土屋信一は「江戸語資料としての式亭三馬滑稽本――助動詞「ぺい」の使用を中心に――」(馬淵記念)で〈いかなる手段を講ずれば、江戸の戯作から、それに反映した江戸語の実体を把握することができるのか〉から改めて問い直し、又(133)に対し〈その中心的な口語が、滑稽本等の戯作の言語の中にも存在し、東京方言に連なる江戸言葉と並存していて、場面によって使い分けられていただろうという仮説を立て〉る。(136)中村幸彦「語義と用語例――江戸時代語研究批判――」(『国語学』123)は皆川淇園(開物学)・成章・御杖流に学的理論に基づくアプローチも勿論欠かせないが、伊藤東涯流の用例第一主義を疎かにすべきでないとして語義探究上の陥り易い四点を具体例により戒める。(137)『重要文化財本朝文粋』(汲古書院)影印の出版のある阿部隆一も『高山寺古訓点資料集第一』の書評(『国語学』126、昭56・9)で漢籍等の扱いはその方面の専門家の先行論著を参考にし、その協力をも得ることが大切で、資料もそのものを中心とする廉価にして簡素・明瞭な形で、と注文する。(138)安田章は「中国資料の背景」(『国語国文』昭55・9)で〈鶴林玉露の日本語は…中国資料として用いること〉の危険性を注意し、(139)「辞書の復権」(同、昭56・6)では室町期の節用集は〈一般社会の多くの人々〉用というよりも〈概ね韻事を目指した〉もので、連歌用書と基盤を同じくしたものとして、文学・語学に再認識を迫る。(140)「朝鮮資料の位置」(同、昭56・12)ではキリシタン資料のもつ後向きの規範性に対し、『捷解新語』の康遇聖が耳と口を通して記し留めたものは前向きの時代先取りの規範が孕まれているとし、そこに朝鮮資料の位置があると論ずる。

以上、多くの価値ある論説をあえて割愛したその上に、なお思わぬ遺漏や見当違いも多々あろうと紙数の超過とともに重々寛恕を乞う次第である。

――香川大学教授――